



Title	パリントンにおける大統領のイメージ
Author(s)	大井, 浩二
Citation	大阪外大英米研究, 9, p. 23-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99009
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

パリントンにおける大統領のイメージ

大 井 浩 二

『アメリカ思想主潮史』（1927-30）の著者W.L.パリントンは、未完におわった第三巻の冒頭近くの、いわゆる「金メッキ時代」を論じる一章に、「アメリカ的風景」というヘンリー・ジェイムズのアメリカ印象記と同じタイトルをあたえて、「変貌するアメリカ」の姿を描きだしている。それによると、「金メッキ時代」から50年もたたないうちに、つまり、彼自身の大著が書きつがれていた時期に、かつての「美しいアメリカ」は「資本主義に熱中して、史上最大の機械制度を作りだす中産階級の土地」に一変し、「散在する農業人口」は「根なし草の、移動しづづけて、磁石に引かれるように仕事に引きつけられる、都市化された工場人口」（Ⅲ、26）になってしまったと考えられる。もちろん、この意見はアメリカが農業国から工業国へ移行した事実を指摘しているだけであって、なんら目新しい内容をふくむものではない。だが、この「今日われわれが知っている規格化された生活、機械文明、大衆心理のアメリカ」は「ジェファソンやジャクソンやリンカンとはまったく無縁のアメリカ」（Ⅲ、26）であるという発言は、アメリカ人パリントンを考える場合、やはり見落とすことのできない意味をもっている。

というのも、パリントンは1920年代のアメリカにきわめて批判的であり、古きよきアメリカの「フロンティアの状態から生まれた強烈な個人主義が、フロンティアの消失とともに退廃してしまった」（Ⅲ、26）ことを嘆いている。いや、『アメリカ思想主潮史』におけるパリントンの声が「手おくれにならないうちに、先祖の生き方にもどること、みずからを改革し、純化することを、アメリカ人に声高に呼びかけている声」であったことは、すでにD.W.ノーブルの指摘しているとおりである。⁽¹⁾ その彼が20世紀のアメリカを語るにあたって、「ジェファソンやジャクソンやリンカンとはまったく無縁のアメリカ」と

いう表現を用いているとすれば、パリントンにおける大統領のイメージを考えると、彼の理想とするアメリカないしはアメリカ人のイメージが明確になってくるのではあるまいか。

あらためて書きたてるまでもなく、パリントンはジェファソン主義の強烈な信奉者であった。『アメリカ思想主潮史』を書きはじめるにあたって、「わたしが種々の材料を評価しようとつとめた立場は、保守的というよりはリベラル、連邦主義的というよりはジェファソン的である」(Ⅰ, i)と明言している。この立場は、彼の書物の全篇を通じて徹底的につらぬかれていて、たとえば個人の作家や作品の評価にあたって、ジェファソンの偏見が露骨なまでにうかがわれることも、しばしば指摘されてきている。⁽²⁾パリントン自身もはっきり語っているように、「民主主義の理想を信じると告白する者にとって、ジェファソンはつきることのないインスピレーションである」(Ⅰ, 355)とすれば、第三代大統領の名前がジャクソンとリンカンのそれとともに言及されているとしても不思議はない。ライオネル・トリリングの言をまつまでもなく、彼にとってジェファソンは「ヒーロー」以外のなに者でもなかった⁽³⁾。だが、一体この大統領のどこにパリントンは「ヒーロー」の資質を見てとったのだろうか。

パリントンにとってのジェファソンは、なによりもまず「理想主義者」であった。もちろん、彼としても、この大統領が「われわれの偉大な政治的指導者のなかでもっともつかまえていない」(Ⅰ, 343)ことをみとめている。また、「一見いかにも矛盾にみちていて、時代の変化とともに、みずからの計画を変化させている」こともまたたしかだが、そのことは彼が「国民をだますために群衆を煽動するような底の浅いデマゴグ」であることを物語っているのではない。それどころか、ジェファソンの背後には「新しい時代と新しい人間の哲学」がはっきりと存在していることを、パリントンは強調する。この大統領こそは、「偉大な革命の理想—人間性への信頼、経済上の個人主義、このアメリカでは、政治的な民主主義の働きで、万人の運命がいささかでも向上され

ねばならないという確信」(Ⅰ, 343)を、ほかのなに者にもまして具現していたと考えられる。とはいえ、その政治哲学において、ジェファソンが「イギリスとフランスのリベラリズムの混合」(Ⅰ, 344)であって、ジョン・ロックの影響を強く受けていたことは否定できない。だが、独立宣言の草案作成にあたって、ジェファソンが「生命、自由、財産」という古典的な表現に、「革命的な変更」を加えたことを、パリントンは高く評価する。「財産」という言葉のかわりに、「幸福の追求」という表現が用いられたという事実は、単にイギリスの中産階級的な発想の持ち主であるロックの財産権についての考えが否定されたということの意味しているだけではない。そのことによって、独立宣言という文書に「それを未来永劫にわたって人間的で、活力にあふれたものとするところになる理想主義の調子」があたえられることになったといえるのである。

こうして、パリントンのジェファソン論は、彼の理想主義の賛美に終始しているといっても過言ではない。だが、『アメリカ思想主潮史』の著者にいわせると、ジェファソンが理想主義者であったことは、当時のアメリカにとって、とりわけ幸運なことであった。「当時の物質主義的な現実主義に影響をおよぼすために理想主義が必要とされていた」(Ⅰ, 344)からである。というのも、ジェファソンが大統領に選出される以前のアメリカにおいては、アレグサンダー・ハミルトンが「現代の英雄」であって、そのあざやかな指導のもとで連邦主義者たちが力をふるっていた。パリントンの説明するところでは、ハミルトンは「政治的な現実主義者」(Ⅰ, 297)であって、「理論家や理想主義者に対して、実際家特有の軽蔑心」(Ⅰ, 298)をもっていた。そして、「偏見なくして政治を学ぶ者としては、ジェファソンにはるかに劣っていた」(Ⅰ, 296)と評されるハミルトンがアメリカに樹立しようとしていたのは、保護関税とか、国立銀行とかいった「資本主義の手先機関」(Ⅰ, 347)にほかならなかった。この人物には「知的な傲慢さ」があるばかりで、「感情は完全に欠如し、一かけらの理想主義もなかった」(Ⅰ, 295)という一文を

読めば、彼がジェファソンとまったく対照的な人物として捉えられていたことが明白になってくる。

こうした時代的背景を考慮にいった場合、ジェファソンが中央集権的な産業主義ないしは資本主義に反対して、地方分権的な農本主義を唱え、「明確な重農主義的傾向」(Ⅰ, 347)をもつ「理想主義者」であったことは、まことに興味ぶかい事実であったといわざるを得ない。もちろん、ジェファソンが重農主義者であったとするバリントンの主張には、若干の疑問の余地があるとしても⁽⁴⁾、『アメリカ思想主潮史』に引用されている『ヴァージニア覚え書』のつぎの一節に、「健全なアメリカの経済体制は農本主義的な経済体制である」というジェファソン好みの主題が表明されていることは否定できない。

もし神が選民をもつものとすれば、大地に働く人々こそ神の選民であって、神はこれらの人々の胸を、根源的で純粋な徳のための特別な寄託所として選んだのである。…耕作者の大部分が道徳的に腐敗するという現象は、いまだかつてどの時代にも、またどの国民の間にも実例のあったためしがない。…一般的にいえば、どの国家においても農民以外の市民階級の総計と農民の総計との比率は、その国の不健全な部分と健全な部分との比率なのであり、またそれは、その国の腐敗の程度を十分に測りうる絶好のバロメーターである。
(中 屋 健 一 氏訳)

あるいはまた、ジェファソン自身、アメリカにおける産業主義の位置づけについての見解を変えざるを得なくなるという事情もあった。⁽⁵⁾ アメリカの非ヨーロッパ化のために工業を徹底的に否定した彼が、月日がたつとともに、工業と商業を農業の補助手段として認知するにいたったことは、ジェファソンの政治家としての見通しの甘さ、変身の早さを物語っているかもしれない。にもかかわらず、ジェファソンが「人間の生命と幸福の破壊ではなく、それに対する配慮をこそ、よき政府の最初の、かつ唯一の正統な目的である」(Ⅰ, 348)

という考えをもっていた点に、バリンソンは注目する。ジェファソンは、ハミルトンとはちがって、“cash nexus”の支配する社会、婦女子や子どもが工場で肉体をすりへらすような社会を黙認することができなかったが、それは彼が「あまりにも社会的関心が強く、あまりにも理想主義者であり、つまるところ、あまりにも人間的であった」（Ⅰ，348）からにはかならない。バリンソンによると、ジェファソンとハミルトンとの「葛藤」は、「農本主義的体制と資本主義的体制との葛藤」（Ⅰ，346）であったと考えられるが、それはまた人間中心的な理想主義と物質中心的な現実主義との「葛藤」であったといえるだろう。

さらにまた、バリンソンによると、ジェファソンは過去を悪とみなしていたが、その理由は「過去が主義と財産をもった人士によって利用されてきた」（Ⅰ，354）ということにある。だが、そうした「主義と財産をもった人士のみに国政をゆだねることができる」（Ⅰ，354）というのが連邦主義者たちの主張であり、「過去の経験に訴えること」が「連邦主義者の議論の主体」（Ⅰ，349）であったとすれば、ジェファソンがハミルトンとその一派を蛇蝎視する結果になったとしても不思議はあるまい。さらに、「ヨーロッパの制度の悪弊」を研究したジェファソンは、国家が拡大し強力になるにつれて、「政治的なレヴェイアサン」が必然的に出現することになり、絶対的な権力が政府の手にゆだねられるときには、そこに「腐敗」と「専制」が生まれることになると考えていた（Ⅰ，349）。つまり、ハミルトン流の連邦政府が確立した場合、そこに「イギリスの制度に範をとった強固な組織」（Ⅰ，349）が出現せざるを得ないわけで、そのことは新大陸アメリカに「ヨーロッパの制度の悪弊」がもたらされることを意味している。こうみえてくると、さきに指摘したジェファソンとハミルトンの「葛藤」は、アメリカの現在とヨーロッパの過去、さらにはアメリカの善とヨーロッパの悪との「葛藤」に置きかえて考えることもできる。

もちろん、ハミルトンとジェファソンの対立から、ヨーロッパとアメリカ、

さらには悪と善といった対立まで引きだすのは、論理の飛躍であるという非難を招くかもしれない。だが、『アメリカ思想主潮史』のなかのいたるところに、さまざまな対立概念がちりばめられていることもまた、否定できない事実である。この大著のなかに、個人と国家、民主政治と少数独裁政治、無垢な人間と墮落した人間といった類いの対立概念がぜんぶで35も見いだされることを指摘したあと、ある論者は「このようにグループに分けられた説明のための図式によって、バリントンは膨大な量の材料に形をあたえることができた」⁽⁶⁾と書いている。どうやら、アメリカの過去を相反する概念でとらえるのは、バリントンの思考のプロセスの特色をなすといっても過言でないようだが、この場合、もっとも基本的な対立概念は、やはりジェファソンとハミルトンのそれであったと考えられる。

結局のところ、1800年という時点において、ジェファソンが第三代大統領に就任した事実は、きわめてアメリカ的な「理想主義」が圧倒的な勝利をおさめたことを象徴的に示している。「二百年におよぶ新世界での経験の結果を、ジェファソンは満足した気分で眺めたとしてもおかしくない」(Ⅰ, 397)とバリントンは書き、「ジェファソンによって代表される、国内での経済体制をもった単純な農本主義のパターン」(Ⅰ, 398)が確立したことを讀える一文で第一巻をおわっている。もちろん、ジェファソン流の「理想主義」がやがてハミルトン流の「現実主義」のまえにくずれてしまったことは、歴史の証明しているところだが、そのことは「彼の理想の高貴さ」をいささかも減ずるものではない、とバリントンは主張する。ジェファソンこそは「後世の人間がかぎりない希望をいだいて帰って行くことになる思想家」(Ⅰ, 356)であるという一文は、バリントンのアメリカとアメリカ人についての意見を雄弁に物語っているといえるだろう。

では、彼はジャクソンに関して、どのようなイメージをもっていただろうか。たしかに、ジャクソンはアメリカが生んだ偉大な大統領の一人であって、バリントンの言葉でいうと、「その心情が庶民とともにあった大統領の一人」(Ⅱ,

146)ということになる。また、「オールド・ヒッコリー」というあだ名からも察せられるように、まことに強烈な意志の持ち主であって、あくまでも自己の主張をつらぬきとおす彼に、当時の大衆は「疑うことを知らない忠誠」をささげたのであった。この意味で、ジャクソンこそは「われわれの偉大な大衆の指導者、われわれの最初の民衆を代表する人間」(Ⅱ, 146)であったというバリントンの言葉に誇張はないといえるだろう。この大統領に「時代の象徴」を読みとろうとする歴史家がいることも、バリントンの発言の正しさを裏付けているかもしれない。『アメリカ思想主潮史』のなかで、ジャクソンのアメリカが重視されるのも、きわめて当然といえるだろう。

にもかかわらず、ジャクソンをジェファソンと結びつけて考えることは、かならずしも容易ではない。すでに見てきたように、後者の「感受性にあふれた精神はロマンティックな理想主義がしみわたっていた」(Ⅱ, 11)のに反し、前者は「本質的に現実主義的であって、ロマンティックな考えはすこししかもち合わせていなかった」(Ⅱ, 147)と書かれている。第三代大統領が「博識で、さまざまな思想になれ親しみ、思索の分野に精通した最高の知識人」(Ⅰ, 343)であったとすれば、第七代大統領は「絶対に読書人ではなかった」上に、「驚くほどに無学で、文法やスペリングは庶民のそれであった」(Ⅱ, 147)とされている。この二人は、あらゆる点で対照的な存在であり、そのあいだに共通の絆を見つけることは至難のわざにさえ思われる。

しかも、青年時代のジャクソンは「中産階級的な哲学に直結する道を、無意識のうちに歩んでいた」(Ⅱ, 147)とバリントンは書いている。投機にふけり、土地の売買に手を出し、馬や奴隸を取引きして、もっぱら財産の形成にはげんでいるジャクソン—こうした人物がジェファソンとはおよそ正反対の考えの持ち主であることはいうまでもないし、そうした「中産階級的な哲学」とそ、バリントンをしてジェファソンにむかわせた最大の動機であったといってもよい。あるいはまた、1824年に書いた手紙のなかで、ジャクソンは保護関税を正当なものともなしている。その背景に農産物の市場の必要性といった

問題がからんでいたことはたしかである。にもかかわらず、保護関税がハミルトンの「資本主義」と切りはなせないものの一つであったことを思い出すならば、ジャクソンとジェファソンの政治的立場の相違がくっきりと浮かびあがってくるのである。

にもかかわらず、パリントンの目には、ジャクソンがジェファソンの「理想」の持ち主として映っていた。パリントンの説明によると、1795年の恐慌で大きな打撃を受けたジャクソンは、しだいに「中産階級的な野心」を捨て去り、「素朴な農民的なものの見方」を身につけるようになる。「この旧弊な農本主義が後年、彼のあらゆる政治的思考において決定的な力になった」（Ⅱ，148）と書かれているばかりでなく、大統領としてホワイト・ハウスにたった8年間に、ジャクソンは自分を発見し、やがて「古いヴァージニア派の農本主義者」（Ⅱ，148）に変身したことも明らかにされている。このように、『アメリカ思想主潮史』の著者は、第七代大統領の「精神における農本主義的偏向」にくりかえし言及することによって、「ジャクソニアン・デモクラシー」の重要性に読者の注意をうながすのである。

もちろん、パリントンはジャクソンが資本主義体制の機構にうとく、そのためにアメリカ経済にさまざまな弊害がもたらされたことを見落としていない。また、ジャクソンによる改革のマイナス面を批判する批評家の存在も忘れてはいない。しかし、パリントンにいわせると、第七代大統領が「農本主義的な立場」をとるようになった事実のほうが、「歴史的にはより重要な」（Ⅱ，150）事件にはかならない。「彼の直観と、その政策の主要なアウトラインがジェファソンのであった」（Ⅱ，151）点をこそ高く評価せねばならない、というのである。あるいはまた、ジャクソンの「連邦政府の権力と仕事」に関する見解がジェファソンの立場にかたむいて行ったことを指摘したあと、パリントンはジャクソンが1834年に書いた政府の理想についての文章のなかに、ジェファソンの最初の就任演説の響きさえも聞きつけているのである（Ⅱ，151）。パリントンにとって、ジャクソンがハミルトン流の「現実主義者」からジェフ

ァンソンの「理想主義者」に転向したことが、なによりも重大な意味をもっていたといえよう。

こうしたジャクソンの転向ぶりをもっとも端的に示しているのは、彼がいわゆる「銀行との戦い」でとった態度であった。合衆国銀行は連邦政府の認可をとった銀行で、連邦政府がその株の五分の一を所有していた。この銀行は再認可を受けることができない場合、1836年に廃止されることになっていた。だが、この再認可の問題が1832年に議論されたとき、議会がそれに関する法案を通過させたにもかかわらず、ジャクソンはその法案に対して拒否権を発動したのである。その理由は、この種の銀行が憲法に違反していて、非民主主義的かつ非アメリカ的であるということにあった。この大統領の態度のなかに「ジェファソンの偏向」を読みとったバリントンは、きわめて当然のことながら、「彼の銀行に対する攻撃はわが国の政治史におけるもっとも勇気ある行為かもしれない」（Ⅱ，149）と激賞したあと、それを「ハミルトンの経済政策に対するジェファソンの攻撃」（Ⅱ，148）になぞらえているのである。この事件に関連して、ジャクソンは「人間性の腐敗」や「腐敗というヒドラ」に対する嫌悪感をくりかえして表明しているが、そうした「腐敗」がハミルトン的な連邦主義の産物であったことや、「腐敗」を知らない農民を賛美したのがジェファソン自身であったことを思いあわせるとき、バリントンがジャクソンの「理想主義」を強調するのも十分に理解できるのである。

さらにいえば、「銀行」という「腐敗のヒドラ」に立ちむかうジャクソンについて語った際、バリントンは「ゆすった巣から出てきたハチ（hornets）の数に彼はおどろいた」（Ⅱ，149）という一文を記していた。ここで用いられている「ハチ」のイメージは、ジェファソンについての一文を自動的に思い出させる：

政治的戦略の名手であった彼は、そのクモの巣を遠く広くにはりめぐらし、ブンブンと鳴く連邦主義者というハチ（bees）が蜜を求めて不注意に飛び出

してくるときを静かに待っていた。(Ⅰ, 342)

連邦主義者も、連邦主義者の銀行とかかわっている「腐敗のヒドラ」も、ともにハチのイメージでとらえられている。ここでもまた、パリントンは「銀行」というハチを相手に戦ったジャクソンの行為のなかに、ジェファソン流の「理想主義」の影を見てとったといえるようである。そして、このハチという共通のイメージは、パリントン自身の「ジェファソンの偏向」の、思いもかけぬ露頭であったのではあるまいか。

最後に、いま一人の大統領であるリンカンについて、『アメリカ思想新潮史』の著者がいっていたイメージを検討しておこう。彼はリンカンに関する文章の冒頭で、「ジャクソンを生みだした平等主義の西部はリンカンをも生みだした」と書き、リンカンが第七代大統領と同じタイプの人間、「同じ土着の精神、同じ正真正銘の誠実な性質、同じ本能的な民主主義の持ち主」(Ⅱ, 152)であったとしている。こうした「西部」の強調は、パリントンがジェファソンは「アメリカ史における最初の西部の産物であった」という一文をある批評家から引用していること(Ⅰ, 345)を思い出せるが、にもかかわらず、リンカンをはじめからジェファソンの人物と規定することは、ジャクソンの場合にもまして困難な仕事であったにちがいない。

というのも、パリントン自身が上の文章につづけて述べているように、リンカンは「進歩という新しい原理が古い農本主義にとってかわった環境によって形成された」(Ⅱ, 152)のである。リンカンが生まれたのは、ジェファソンが輝かしい勝利をおさめた1800年からわずか9年後にすぎないのだが、すでに産業化の波は西部の世界にも押し寄せてきていた。農本主義のそれとはまったく「異った生活のパターン」を作りだしていたのは、「資本主義」や「工場生産の技術をもった産業主義」にはかならなかった(Ⅰ, 398)。こうした環境のなかで育ったリンカンは「進取の精神」に無条件に賛成し、彼にとって「理想的な進歩」は「能力のある者がたくみな搾取によって出世するこ

とを許す流動的な経済」と結びついている。さらにまた、「利益という動機」が「社会の正統的な原動力」であるとするリンカンは、「農本主義的な秩序から産業主義的な秩序への移行を見守っているうちに、古いものよりも新しいものに共感をおぼえるようになった」（Ⅱ，154）とバリントンは書いている。結局のところ、「搾取」という原則を容認しているリンカンは、「アメリカにおいては、搾取のための機会をすべての市民に開放するという単純な方法で資本主義を民主化することができると信じている小資本家」（Ⅱ，154）の立場にあった。ジャクソンの場合と同じく、読者のまえに示されるリンカンは、ジェファソンの立場とはもっとも遠い位置を占める、ハミルトン的な人物になっている。だが、これがリンカンにおける「ジェファソンの偏向」に光をあてるための、著者の戦略であることは、あらためて書き立てるまでもあるまい。

といっても、「理想主義者」リンカンの誕生にいたるまでのプロセスに、バリントンはかなりのページを費している。彼によると、リンカンは「現実的なセンス」の持ち主であったが、それは「政治的な現実主義」の別名にほかならず、そのために理想主義を自由に発揮することができなかったばかりか、「オポチュニスト」になることをも余儀なくされたのであった（Ⅱ，156）。このように、リンカンが「現実主義者」であったことは、彼とハミルトンとのつながりを暗示しているのだが、バリントンは前者の「強制的な政府という貴族的な原則」に対して、後者の「ギブ・アンド・テイクという民主的な原則」を強調することで、両者のあいだに明確な一線を引くことも忘れていない。ともあれ、「何十もの目に見えない絆」でしばられた、「単純で、寛大で、のんきな男」（Ⅱ，156）リンカンのイメージが、バリントン一流のくどくどしい文章でたっぷりと描かれているのである。

こうした「小資本家」リンカンが「民主主義の信念」の重要性に気づくにいたるのは、奴隷制度を独立宣言の理想—あのジェファソンの理想—にたてて眺めなおしたときであった、とバリントンは考える。バリントンによると、「あ

の偉大な文書の原則は、その不安定な時期には、すべての人間の足下に横たわっていた。…その原則は容易に無視したり、さけて通ったりすることはできなかった。対決されねばならなかったのだ」（Ⅱ，152）。こうした時期にあって、リンカンはいそれまでの「小資本家」的な立場を捨てて、敢然と立ちあがる。彼が奴隷制度に反対したのは、その「道徳的不正」に注目したからであり、こうした「人道主義的な動機」と「国家の統一という理想」とを結合させることで、南北戦争という危機に立ちむかったというのが、『アメリカ思想主潮史』の著者の解釈である。こうした見方があまりにも単純かつ明快すぎることを指摘するのは、もちろん容易だろう。だが、リンカンにジェファソンの「ヒーロー」に仕立てあげようとしているバrintンの姿勢そのものに、すでにふれた彼自身の「ジェファソンの偏向」がうかがわれるという事実注目すべきではないだろうか。ともあれ、バrintンがリンカンの政治家としての活動を検討した結果、「その正義を愛する気持とあたたかい人間性において、リンカンは本質的にジェファソンのであった」（Ⅱ，158）という結論に達している事実は、彼自身の「理想主義」的な態度をくっきりと浮き彫りしているのである。

と同時に、その彼の「理想主義」が20世紀のアメリカの現実のまゝに奇妙なとまどいを見せている事実もまた、読者としては見落とすことができない。すでにふれたように、1920年代のアメリカが「ジェファソンやジャクソンやリンカンとはまったく無縁のアメリカ」であることにバrintンは気づいていた。1800年という時点で完成したジェファソンの理想主義のアメリカ、そして、その伝統をつぐジャクソンとリンカンのアメリカ——それはすでに20世紀の現代では実現不可能な夢になってしまったという意識が、バrintンのなかにあったといつてよいだろう。もちろん、『アメリカ思想主潮史』におけるバrintンは、「産業化したアメリカの挑戦を受けることのない、ほこらしげな伝統のスポークスマン」として、「1920年代の若者にジェファソンの理想を放棄しないように訴えている」⁽⁷⁾ という見方も成り立つだろう。だが、

彼がひどい挫折感と敗北感を味わっていたことは、やはり否定できないのではあるまいか。

すでに見たリンカン論のおわり近くで、リンカンが「うすぎたない帝国主義の時代に、あの偉大なヴァージニア人の初期のリベラリズムにもどって行った」ことを賞賛したあと、20世紀のアメリカにふれて、バリントンはつぎのように書いている。

さらに巨大な帝国主義とさらに膨大な複雑さの時代において、われわれはリンカンの人道主義と、偏見のない心と、寛容と善意に対する信頼と、失望にもかかわらず崩れることのなかった民主主義の信念とを参考にすることがきる（Ⅱ，159-60）。

この一文は、1920年代のアメリカにおいては、もはやジェファソンの「リベラリズム」に立ちかえることは不可能であり、ただ「失望」を味わうばかりであることを暗示していると考えたい。一見いかにも楽天的で、進歩としての歴史を信じつづけたバリントンの苦悩に目をむける必要がありはしないだろうか。

こうした進歩主義の歴史家としてのバリントンの「典型的な緊張状態」について、ジーン・ワイズは「研究が現代に近づくにつれて、バリントンはその知的なジャイロスコープを失いはじめる」と書き、「アメリカ的経験が彼から遠ざかりだして、彼の二極的な対立概念ではもはや律しきれなくなる」⁽⁸⁾と記している。かりにこの論者のいうように、第三巻のバリントンの混乱しているように思われるとすれば、それが未完のままに残されているという事実から、なにか象徴的な意味を読みとることが可能であるかもしれない。

- (1) David W. Noble, *Historians against History* (1965), p.99.
- (2) 拙稿「V.L. Parrington 再考」『大阪外国語大学学報』第29号(1973年)
- (3) Lionel Trilling, "Reality in America," (in *The Liberal Imagination*, 1950) 参照
- (4) Richard Hofstadter, *The Progressive Historians* (1970; Vintage Books Ed.), pp.426-7.
- (5) A.Whitney Griswold, *Farming and Democracy* (1948), pp. 18-46.
- (6) Gene Wise, *American Historical Explanations* (1973), p.257.
- (7) Noble, pp.108,116.
- (8) Wise, p.267.